

こころの芸術広場を支え 未来へ引き継ぐ

美唄市 認定 NPO 法人アルテピアッツァびばい

きれいに刈り取られた芝生のかなたに、白い長方形に球をはめ込んだ彫刻が1体。丘のふもと中央広場には石舞台がしつらえられ、それとクロスして大小さまざまな玉石を敷きつめた小川と池の水辺が展開する。いずれの石も遠くイタリアから運ばれてきた純白の大理石。緑に榮え、秋の日差しに反射して目にまぶしい。

ここは美唄市の山間に広がる野外彫刻公園「安田侃（かん）彫刻美術館 アルテピアッツァ美唄」。廃校になった古い木造の小学校校舎と、その周辺の敷地を整備した7万㎡という広大な自然の中に、彫刻家・安田侃の大小40以上の彫刻が点在。というよりも広大な空間そのものが安田の作品といった趣の、国内でも希有の美術ゾーンで、訪れた人たちにいこいと安らぎを与えるこころの広場を提供している。

この芸術ゾーンの管理・運営の全般を美唄市から託されて担っているのが認定NPO法人「アルテピアッツァびばい」である。「こころの広場を後世に残したい」という安田侃と市の熱い思いを体して、適切に進める対応がゾーンの一層の充実をもたらし、道内外の評判は上がる一方。人口減でとかく沈みがちな旧産炭地は、道内屈指の薫り高い文化のまちへと変身しつつある。

■ 彫刻家と自治体の思い一致で誕生

「アルテピアッツァ美唄」は、相次ぐ炭鉱の閉山で人口が急減した美唄市の、都市再生への願いと、日本国内でのアトリエを探していた安

田の思いが一致して実現した。

美唄市は1973年（昭和48年）頃まで11の炭山があり、人口も9万人を越す道内有数の炭鉱市だった。それが全山閉山によって2016年（平成28年）には2万2千人まで減少。子どもも減って、全盛期には児童数1250人を数えた炭鉱地区の市立栄小学校も、併設の幼稚園を残して廃校となり、その跡地の活用は市にとって急務だった。



秋の日差しに照り映える石舞台と水の広場。左手後ろはアートギャラリーの旧栄小の木造校舎

その頃、イタリアに居を構えて創作活動を続けていた安田は、日本国内にアトリエ（収蔵庫）を求めていた。安田は美唄の高校を出て道教育大、東京藝大大学院彫刻科を終了後、イタリア招聘留学生として渡伊。ミケランジェロも使った真っ白い大理石を産するピエトラサンタにアトリエを開き、大理石とブロンズによる彫刻に没頭。ヨーロッパ各地で開いた作品展はいずれも好評を博し、世界的な評価を得ていた。ちなみに作品は道内でも札幌駅、旭川駅、札幌コンサートホール「キタラ」などにも設置され

ていて道民にもおなじみ。

その安田が帰郷して目の当たりにしたのは活気を失った郷里と、朽ち果てんばかりの栄小の廃校舎だった。とはいえその周辺は三方を森、一方を川に囲まれた緑豊かで、静かなたたずまいに包まれていた。

「アトリエはここだ」——安田の芸術家としてのカンがひらめいた。廃校の跡地利用を模索していた市の思惑とも合致し、この地に日本の拠点を置くことに決めた。1985年（昭和60年）ころのことである。



彫刻は触っても、上がっても自由。ノビノビと遊びたわむれる親子連れ

市はその意を受けて荒れ果てていた体育館を修復して作品の保管、一部展示を始めた。この作業を進める過程で安田は、校舎の1階に開かれている栄幼稚園の園児たちと触れ合った。まちの栄枯盛衰など知らぬげに無邪気に遊び回る子どもたち。「この子らの笑顔こそ郷里の歴史を未来につなげていく財産だ。そうだ、この子らがここをを広げることができる広場を作ろう」——この熱い思いが、1992年（平成4年）の「アルテピアッツァ美唄」開設となって

結実した。アルテはイタリア語で「芸術」、ピアッツァは「広場」の意味。いずれも安田の発案で決定した。

■ 彫刻公園として着々充実

そうと決めた後の展開は早かった。美唄市と安田はまず、運び込んだ彫刻5体を野外の適所に展示。また市は、朽ちかけていた校舎を修理してアートギャラリーとし、のちに隣接して廃屋になっていた市営住宅数棟を撤去して広場を広げ、芝生や木を植えるなど野外彫刻展示場としてふさわしい環境を整えていった。呼応して安田も大小の作品を次々と搬入、森や川、起伏に富んだ土地にマッチするように彫刻を配置。1997年（平成9年）にはピアッツァのメインとなる石舞台と水の広場を完成させた。いまここは、夏は水にたわむれる子どもたちの歓声、冬は雪まみれになって転げ回る子らの元気な声が響き渡り、作者が描いた思い通り「子どもをのこころを開く広場」が実現している。

ゾーン整備はその後も続き、2001年（平成13年）にはそのユニークなまちづくりの手法が評価され道の「北のまちづくり賞」知事賞を、さらに翌2002年にはピアッツァのたたずまいそのものが評価され「第15回村野藤吾賞」を安田侃が受賞した。こんな流れで、自然と彫刻が融和した公園の真価は道内外に知られるようになり、翌2003年には天皇皇后両陛下も鑑賞に訪れている。

■ 管理・運営は民の手で NPO 誕生

公園の整備はその後も続いたが、基礎固めが終わった段階で、この施設の管理・運営は市直営より民間の方がふさわしいのでは、との気運が高まり、市民の中からも「我々の手で守ろう」の動きが出た。こうして公園の管理は民の手に託されることになり、2005年（平成17年）特定非営利活動法人（NPO法人）「アルテピアッツァびばい」が誕生。翌年から指定管理者制度の適用を受け管理・運営を担当することになった。さらに、2013年には北海道条例による指定NPO法人の第1号となっている。名前は、広場のイメージを損なわないよう「アルテピアッツァ」のイタリア語はそのまま残し、地名部分だけを漢字からひらがなにした。理事長には安田と親交があり、美術にも造詣の深い磯田憲一・元道副知事がついた。

NPOの活動は公園内の古い校舎、芝、森林の修理、手入れから彫刻の清掃、除雪、独自の彫刻教室やアート展、音楽会、鑑賞会の開催、喫茶店やグッズ販売、各種PR活動等々幅広い。ほかに、かつて産炭地だったことの思い出を残す仕事も担当している。

多くの仕事の中でもっとも力を入れているのが作品の清掃と彫刻授業の開催だ。

展示彫刻の清掃、除雪は休日以外は毎日の日課。朝8時、スタッフが集まり、手分けして一体々拭き清め、大きいものや表面に凸凹のあるものは特殊な洗剤と水で汚れを落とし、冬は除雪して雪道をつける。彫刻を常に創られた時

の状態で見えてもらうことと、訪れた人がさわったり腰掛けたりしてもいいようにとの配慮からである。というのも、この広場は開設当初から、安田の思いを入れて入場料は無料、彫刻は触れても寝そべっても自由、観る人が感じていこいや、安らぎを得てもらえればいい、との哲学が貫かれているのだ。だから広場には順路はなく、彫刻には「妙無」、「天秘」などの作品名はあるものの、実際の像の前には作品名や説明は一切なし。どう観て、どう感ずるかは観た人にまかせられており、感じた人はその度合いに応じて「寄付金をどうぞ」といった大らかさだ。



こころを彫る授業で、白い大理石に一心不乱にノミを振るう参加者たち

彫刻授業・「こころを彫る」は、NPOの事業の目玉の一つ。これも安田の提唱で始まったもので、用意した大理石をこころの赴くまま気の向くまま、ノミと金槌で彫ってゆく催し、安田が来日している時は、直接指導を受けられる“幸運”もあるが、通常は彫刻に心得のあるスタッフが指導にあたる。授業料は白大理石を使ったコースが一般1万5千円など。毎月第1土曜日、日曜日に公園内の体験工房「ストゥディ

オアルテ」で開かれており、毎回、全国から集まった彫刻愛好者が両手のひらほどの石にノミを振るい“自分のところ”を彫っている。

2016年10月1日（土）、2日（日）にも男女10数人が集まり、工房の内外や緑の木陰の下で一心不乱にコツコツコツ。札幌から参加した主婦（50）は「彫っていると何もかも忘れて無心になれます。命の洗濯をした気持ち」と満ち足りた表情。

ユニークなのは、閉山で山を去った人たちが望郷の念で帰郷した際の温かい迎え入れの催し。働いていた当時の記憶や思い出を、次世代へ語り継ぐ場として、旧校舎の教室で炭鋳写真展を開いたり、炭鋳事故で今なお地底に眠るヤマの男たちの鎮魂のための盆踊りを中央広場で開くなど、炭鋳のマチの歴史を未来へ継ぐ努力が続けられている。毎年参加して往時を偲び、涙する炭鋳マンも多い。

■ 財政難は“志”でクリア

これら維持管理・運営に費やす費用は年間約4千万円。収入の半分近くは指定管理者として受け取る委託料、あとは寄付や工房事業、喫茶やグッズ販売収入など。とはいえ、これだけの膨大な仕事をこなしているので台所はいつも“火の車”。そこで、資金集めの一環としてピアッツァを支える会員になってもらい、年3千円の会費を納めてもらう「アルテ市民ボボロ」制度を立ち上げ、現会員は600人ほど。また、寄付をすると税金から控除される「認定特定非営利活動法人」に道から認定を受け、かけ

がえのない空間を未来に繋ぐ事業への寄付を呼びかけている。

さらに2016年春には、新たに学芸員を配置し、資料数も基準を満たしたので「美術館」および博物館として正式に登録し、それまでの「アルテピアッツァ」の上に「安田侃彫刻美術館」の名が冠された。両館長は磯田理事長が兼任。これにより来館者は一層はずみがつくと関係者は期待を寄せている。

清貧の中で、この美術館の管理・運営にあたる磯田理事長（館長）は「数や量に依拠するのではない新たな価値を創るのがこの美術館の役割。その戦列に加わり、お手伝いできるのはとても幸せです。いつまでも変わらずに、そこに存在することの意義に共感する人々の輪を広げ、日本にも世界にも類例のない“ピアッツァ”を創り続けてゆきたい」と夢を語っている。

■ 連絡先

〒072-0831 美唄市落合町栄町

認定NPO法人アルテピアッツァびばい
理事長 磯田 憲一（いそだ けんいち）

TEL/FAX：0126-63-3137

Email：arte@artepiazza.jp

URL：http://www.artepiazza.jp/